

〔書言字考節用集生六〕白蘇草 荏本名

〔段注說文解字下一〕荏桂 荏蘇也 是之謂轉注 凡轉注有各部互見者 从艸任聲 如甚切

〔東雅穀十三〕倭名鈔穀類にしるせし所を見るに、荏讀てエといひ、蘇讀てヌカエといひ、香茅讀てイ

ヌエといひ、稗讀てヒエといふと見えたり、已上の三種并に荏により名を得し所と見えけり、荏

をエといふ義不詳、韓地の方言の轉せしに似てけり、凡我國の俗、細にして小なるものを呼びて、

ヌカといふは、糠の義也、似て非なるものを呼びてイヌといふ、蘇をヌカエといふは、荏の類にし

て、葉の細なるを云ひしなり、香茅を呼びて、イヌエといふは、荏に似て非なるをいひしなり、

〔倭訓栞前編五〕え○中 荏は倭名抄に見えたり、今え胡麻といふ、

〔本草和名十八〕荏子、一名荏魚、重油其子作油、和名於保衣乃美、

〔醫心方一〕荏子 和名於保衣乃美

荏栽培
〔農業全書四〕白蘇 上方にては、るごまと云也、

白蘇みは子を取て油にする物なり、雨具などを調へ、さし笠にひくも皆此油なり、其外用多し、燈油

にして光よき物なり、是も白黒の二種あり、二色共に宜し、肥たる細沙地取分よし、すべて何土に

ても深く耕しこなしをき、苗四五寸の時畦作りし、地の肥瘠を見合せ、がんぎを切、一本づ、種る

間七八寸、或肥たる地は一尺餘も隔、少深くうへ、糞は何にても有にまかせて多くも用ゆべし、厚

く培ひ芸りなど、大かたにしをきても、少も草痛みもせず、よくさかゆるものなり、是なを牛馬の

さはる物にあらず、畠の端道ばたなど、牛馬の喰ふ穀のふせぎとなるべき所にうゆべし、木かけ

物かけ、屋敷廻りの、他の作り物の、かつてよからぬ所にも、大形には出來、殊に早なが雨にも痛ま

ず、秋大風時分は、いまだ花咲すしてつばみ、葉の間にあるゆへ、風損も大かたはなし、小鳥は少々

付といへども、他の鳥けだ物は、そこなはず、大抵の地にてよく作り合せぬれば、雜穀等の利分の